

# 農村観察者・渡部信義

——詩集『灰色の藁に下がる』をめぐる

## 西 杉夫

詩の核心をずばりとついたものであった。「私は久しいこと、村の詩人を待ち望んでいた一人である」と前田河はかきだしている。

表紙にレタリングで黒く、「灰色の藁に下がる」とかかれた、文庫本と同じサイズの詩集が出たのは、大正もぎりぎり、一四年の七月のことだった。渡部信義著。一四九ページに農村を題材にした詩が四五篇つめこまれていた。堺利彦らの社会問題叢書を出している文化学会出版部の発行である。そしてこの小型詩集は今日にも通じる問題を鋭く提起していた。

この頃の詩集は著名な人に序文をもらう場合が多かったようで、この詩集も例外ではなく、前田河広一郎の序がついている。そしてこれがお座りの序文とは違い、渡部信義の

前田河のイメージでは、村の詩人というの、古い洋傘を杖にして、強い田舎なまりで話し、泥のついたゴム靴をはき、風呂敷から詩の原稿を土あかのたまった太い手でとりだすのである。人一倍はにかみ屋の詩人は、詩の原稿をポストに入れる時は手がふるえる。むろん都会は詩人を受け入れようとはしない。

渡部信義はそのような詩人だったか？  
前田河によれば、そうではなかった。内気そうでもあり、田舎なまりでもあることはあったが、都会についての知識もち、「まあ一口に云ふと、農村を出たインテリゲ

ここで渡部の印象についての、もうひとつの例をあげておこう。渋谷定輔がその『農民哀史』でかいているもので、渋谷についてはあとで渡部との対比でふれることになるが、ここでは渡部にかんする記述だけをとりあげておく。

大正一四年（一九二五）六月二五日の日記に、渋谷はこう記している。

「新聞の学芸欄を見ると、文化学会出版部から出た詩集の消息がある。渡部信義氏の『灰色の藁に下がる』というのだ。彼はインテリゲンチヤで、農民のことを詩に書いたものらしい」。

また渋谷が作家の犬田卯のところで渡部といきあったこともかいている。大正一五年（一九二六）二月三日の日記である。

「掃り仕度をしているところへ、渡部信義氏が訪ねて来られた。犬田氏の紹介でちょっと挨拶したが、一見したところ、都会のインテリのような感じであった。詩集『灰色の藁に下がる』の著者なのだが、何となく都会人的だ」。

インテリということばが出てくるのが目立っている。農村に生まれ育ち、そしてそのときも生活がそのただなかにあった渋谷にとって、農民詩集とうたわれたものが先に出たこ

ンツィアといふ風な人である」というのだ。

自分の想像とは違っていたといえながら、しかし前田河はその詩に農民らしきを見る。そういうことだとすれば、実際の人物がインテリ風だとしても、渡部はやはり村の詩人と呼んでいいことになる。「この詩集『灰色の藁に下がる』は純朴な、非都会的な、ごく平易で、畑の中へ捨てて置けば畑といっしょになつてしまふやうな調子の詩が多く、従つてそれに鄭重に克明に取扱はれてる小さな悲劇や喜劇などには：（中略）：根強い鈍重な、土からの直接生産者の煩悶がありありと読める」というのが前田河の意見だ。

渡部が農村生えぬきの、土のにおいをぶんぶんさせた農民詩人ではなく、インテリ風の詩人であり、そういうところから農村に對したこと、そこから一面では観念性が生まれ、一面ではそういう立場にもかかわらずとか、それゆえにというか、このあたりもこれから考えていくことになるのだが、ともかくその詩には農村の現実がこまかく、しつかりととらえられていること——ここに渡部の詩をつらぬく特質がある。そのことを前田河は、村の詩人のイメージを語りながら、さりげなく、しかし正確に指摘していたのだった。

とにたいする対抗意識があつたのかもしれない。そういうことも含めて、渡部にたいする当時のひとつの見方として記録しておきたい。

## 二

渡部信義の詩の観念性と描写性——この二つの特徴を、具体的な詩を通じてあきらかにしていきたい。とりあえず冒頭の詩でいだろう。「黒吹雪」という。渡部はなんとも黒ということばのすきな詩人で、吹雪は普通は白とかその類の色ということだろうが、渡部にかかると黒くなつてしまうのである。

吹雪は吹雪く  
黒吹雪、  
憂鬱の額は割れて、  
野端にまた募り行く  
黒吹雪。

これがその第一連である。ここでは三行目の「憂鬱の額は割れて」というのが目にとまる。対象をなにも見えていない、中味の乏しい詩的通俗語だ。このようなことばをもつてくることで、なにか詩らしくなるといった

思いこみが渡部にはあるようで、そういう「教養」が身につくようなコースを歩んできたことをそれは示すのだろうか、むろん詩的には弱さとなっている。  
詩はつぎのようにつづいている。

ああ、どつと募り行く  
吹雪——  
入口の蓆は巻くれ  
戸の破れ目にうそぶき唸る凍えた死の絞  
声、  
雪片は小屋の中に躍り込む。

ここでは作者の目は小屋の入口や戸のありさまにとどき、やや具体的な観察が行なわれているが、しかし「死の絞り声」といった実体的ないことが詩をあいまいにしていることに気づいていない。

さらに詩はつづいていく。

氣息は押し潰され、  
薄暗い小屋の中  
藁屑にまみれて繩をなふ。  
だかに土間を四角にくぎつた爐の中に  
燃える藁火

黒い胸は裂けて燃え上がる  
赤い呪の炎！

——その上に天井から屋根裏の煤が垂れ下  
がり揺れてゐる。  
煙は吹雪に押されてうちへ舞ひ戻る。

おわりの二行あたりには渡部の力量があら  
われている。対象へのこまかい観察によって、  
出口のない暮らしの重さが、あざやかに印象  
づけられるのだ。そこではたんに事実を並べ  
たというのではなく、見るべきものを見てい  
るということであって、そこには渡部の腕の  
たしかさといったものも感じられる。

だがそういうものに徹することがなかなか  
できないというのも、また渡部の詩であって、  
ここでも二行の直前には、「赤い呪の炎」と  
いった、きまり文句をもってきているのだ。  
そのまえの「黒い胸」にしても、内容のはっ  
きりしないことはであり、また黒と赤とを対  
比させているにしても常識的すぎる。こんな  
通俗語がなにか詩として効果をもつような錯  
覚のもとに、作者は並べたてているわけだが、  
読む方には現実はいっこう伝わってこない。  
そして観念語すぎなところに、すでにふれた  
渡部のインテリ性といったものが、かかわり

があるといっている。いいだろう。  
詩はさらにつぎの連につづく。

吹雪は吹雪く、  
樹木は空しく腕を打ちあふばかり……  
——百姓をしながらそれで飯が食へないと  
云ふのだ

米に苦しまなければならぬと云ふのだ、  
何時になったら一体俺達はいい目にあふこ  
とが出るのか？

ここにきて呪の意味があきらかになったと  
いえる。つまり米を作っても食えないことへ  
の不満であり、しかもそれがいっこう改善さ  
れそうもないことへの怒りである。しかしそ  
れがわかったことは、残念ながら詩の深化に  
はなっていない。死だとか、呪だとかを観念  
的にふりまわすのではどうにもならないし  
ても、このように解説をされたところで、事  
情は変わってこないのである。

詩はここまでで半分ちよつとであり、この  
あとさらに小作暮らしの苦しさとそれへのい  
きどおりが、おしよせてくる吹雪とのからみ  
でくりかえされていく。  
冒頭にあった詩をとりあげて、ややくわし

くふれてきたが、渡部の詩のなかでこれがと  
くにすぐれていると思われているわけではない。  
しかし渡部の詩の二つの特質、その観念性と  
描写性を検討するには適している。あるとこ  
ろまでは対象を見ている、それに観念がおし  
かぶさっていき、その対立とこきまざりのな  
かで、そのいずれかにウエイトをうつしなが  
ら成立しているのがこの詩なのだ。そして描  
写性と観念性がこのように一つの詩のなかで  
共存したり、また別の詩ではいずれかが主導  
したりするが、いずれにしても二つの大きな  
流れとなって、渡部の詩のすべてをさしつら  
ぬいている。

### 三

それでは詩集『灰色の藁に下がる』の全体  
にわたって、渡部信義の描写性と観念性のあ  
らわれを検討してみよう。

この二つの特徴のうち、詩的な意味をもつ  
のはむしろ描写的な側面であって、これによ  
ってかくとくされたその質は、日本の詩に初  
めてもたらされた種類のものではなかった。描写  
性がウエイトを占めている詩をとりあげよう。

道が遠く町から続いて来て

村の中に入って曲ったところ——

そこに黒い胡桃の木の枝の下に

雑貨店と障子戸に書きつけた家の前に

黒い村の郵便箱が立っている、

頭には憂鬱な雪をいただき

いつも黙ったまま風に吹かれて立っている。

その郵便箱には、

町の華やかな赤いポストのやうに

娘達の華奢な手でつれづれのまに書かれ

た桃色の洋封筒や

商人の達筆に書かれた儲け仕事の端書やは

投げこまれない、

汚くくちやくちやくと書かれたものが、

涙をたらしみすばらしい子供や

荒しい冬に目立たぬ保護色のやうな服装を

した者達の手から投げこまれる。

これは「村の郵便箱」という詩の前半である。  
やや平板な面はあるけれども、村の情景と、  
その焦点としての郵便箱の確にとらえられ  
ている。またしても「憂鬱な雪」などという  
ことばがあって、よほどの憂鬱すぎというこ  
とになるだろうが、全体としては対象をしっ  
かりと見て、それをベースにしながら、その

郵便箱に投げこまれる手紙の中味について、  
想像をひろげていくのである。

郵便箱はせまい閉鎖的な村に開かれた窓で  
あって、それによって世界とつながり、新し  
い情報はそこから流れだしていくのだが、そ  
の情報にしたところで、村の生活の貧しさと  
苦しさに色濃くぬられたものでしかありえな  
かった。

そして詩は郵便箱の周辺に目をやったつぎ  
の三行でおわっている。

その前面彼方には  
枯木の枝を透して空しく働き疲れた水田が  
累々と雪におほはれて横たはっている。

郵便箱を利用する農民の生活に思いをめぐ  
らせたあとに、それにふさわしい水田のさび  
しいありさまがえがかれているわけで、ゆる  
みのない構成となっている。

そして渡部はそういう貧しい農民の個々の  
暮らしにも目を向けて、つぎつぎと詩を展開  
している。

小屋の前の石の上で  
頬冠りをした老婆が屈んで藁を打っている、

——向ふの雪の屋根の上  
叢り生えた桑の木の枯枝を透して  
黄色い夕空が寒さうに近々と迫っている。  
老婆は瘦腕で藁を打つ、  
そして力のはいらぬその音が  
バサツ、バサツ……と静かな中に響いて行く。

これは「藁打ち」のかきだしである。詩は  
つづいて物理的に展開する。朝出たきりだっ  
たおやじが帰ってきて、藁をうちつづける老  
婆にたいして、そんなことやめちゃえとい  
うが、やがて家のなかへさびしく入っていく。  
ついで若者がやってきて、やはりやめるとい  
うが、なにかの足しにという老婆にうなずい  
て、老婆に代って藁をうちはじめる。

力の入った重いその音がドンドン……と響  
く、  
老婆はその傍で打ち上がった藁束を数へて  
ゐる、

空にはまだ薄黄色が残っているが、  
地面には暗く夕闇が這出して  
何處か物陰でミソサザイがチュツ、チュツ  
と寒く鳴いてゐる。

詩はこのようにおわっている。すべて寒々とした貧しい光景であり、それを作者はたんとんと、しかし見るべきものはじつくりと見ながらえがきだした。作者の主観的なことはほとんどなく、対象を正確にとらえて投げだしているだけだが、そのことで農村の重苦しい生活のある断面が、リアリティをもって定着されたのである。

このような詩の描写にたいして、そのくどさ、羅列性を指摘する見方もあるだろう。しかしわたしはむしろ逆で、渡部はそれをもっと徹底して押し進めるべきだと思ふ。渡部はそれまでに詩人が入ることのなかった新しい世界に踏みこんでいるのであり、こういった場合には描写というのはいへん有効なのだ。

農村ルポルタージュとでもよびたいこういった系列の詩を、渡部はいくつもかいており、そこでもまた観念的な思入れが描写をときには邪魔しているものの、農村のさまざまな人物、さまざまな風景をとりこむことによつてえぐりだされたのは、大正期日本の、打開の方向が見いだせない現実であった。

たとえば「村の鍛冶屋」では、すすけた仕事場のなかで親子の鍛冶屋が懸命に働いてい

るが、その老いた顔、青い顔は前途を見いだすことができず、悲しみのなかでただ鉄をうちつづける。「木割り親爺」に登場するのは酒屋の奉公人である、へんくつな木割り職人で、ことばをかけてもろくに返事をせずに、怒りの気持をこめて木をたたきわっている。

「鼻缺けの男」に出てくる八作親爺は代々の水呑み百姓だが、若いころにあまりに不合理な百姓暮らしがいやになり、町で酒と女におぼれ、そのあげくが病気を背負って鼻欠けになったのであり、その鼻を笑う者があれば、そんなお前が生きているのでたらぬ世の中は、やっぱり鼻欠けではないかと毒づくのだ。「老爺は北窓に向ひ」では長いあいだの労働に疲れはてて、視力も失った老人が、北窓に向かいあつてすでに考える力もなくなり、ただ死を待っているというのである。いずれも希望のかけらもない暮らしであり、そのなかで生きようこめく群像であった。

いまあげたのは男たちを題材としたものだったが、渡部は農村の女たちの暮らしにも同じように鋭い目を向けている。そしてもちろん女たちが生きていく条件が、男たちより恵まれているはずもなかった。たとえば「夜乞食」では不景気な年末の夜にやってくる乞食

をとりあげているが、この乞食はじつは食うに困った百姓の女房なのであり、顔をかくして目だけをちよつと出し、近所を物乞いしてまわるところまで落ちたのだ。また「酒瓶を抱いて行く娘」には、働き疲れた父親のために、毎夕わずかな酒を買うために酒瓶をしっかりと抱いてやってくる娘の、うす汚れた着物と乱れた髪、青ざめた頬がえがかれる。貧困は男女を問わず、農村のすべてをおおいつくしているのである。

渡部はこうして老若男女、多様な人物を登場させて、いきどころの重い暮らしをとらえているが、そのかき方は詳細であり、的確であることできわだっている。むろん渡部がかいたこれらの詩が、事実の記録であるかどうかは問うところではない。ただ、まさにそのようにありえた内容で、生々しく、あざやかにさしだされたのだった。

渡部の詩ではこういった描写的な詩をわたしはもっとも高く評価するわけだが、すでにふれたように渡部はそのような詩ばかりをかいたわけではなかった。いまあげたような詩にしても、かならずしも描写で一貫したものでばかりでなく、しばしば常識的な観念語がまわりついて、詩としての力を弱めているの

であり、さらにはそういう観念語による展開が主となった概念的な詩もいくつも見られるのであって、これもまた渡部の特徴——マイナスのそれを形成しているのである。このような詩ではことばの高ぶりとはげしさだけが浮きあがって、詩的な説得力をいっこうにもたないのだ。

たとえば「吹雪の家」はこんな詩だ。

雪が嵐に叫ぶのか、

嵐が雪に叫ぶのか、

ああ、荒れ狂ふ何の怒り？

狂ふ狂ふ、真白に、真黒に、ただただ……

天地の間

奔騰し渦き壊れ飛散する呪の針！

呪は生長する吹雪に吹き曝された野中の百

姓家。

——ああ、どんな奴等でも通るなら通って

みろ！

ただでは通さねえぞ！

ここには渡部の現状にたいする否定的な気持は出ているものの、さわぎのわりにはそれがいっこう鮮明になっておらず、さいこの二行にしてもたんなる強がりに終わっていて、

切りこんでくる力もっていない。反体制的な詩にあつても、主観的なことばをぶつけることよつて成り立つ場合ももちろんあるわけだが、そのときも対象への視線が、表に出てくるかどうかは別として、やはり必要だったろう。浮いた叫びは、それこそ吹雪のかなたへかき消えてしまふばかりだ。

あるいはまた「闇を焚け」では、老人がいろりに薪をくべる光景をえがきながら、そのもえあがる火について、

その火だ、それがそのまま百姓家の屋根を

つきぬけて燃え上がったなら、

おお、その時こそ、その時こそ——

ああ、いっさいの闇を焚け、いっさいの邪

悪な闇を焚け！

とうたいあげるのだが、大げさな身ぶりのわりに、なにほどの感動も生まれるわけではない。このような現実から離れた叫びは、このあとの時代のプロレタリア詩に見られるものであり、その意味では先駆的といえなくもないが、そんなことは詩的な価値をもってはいない。

これまで調べてきたように、渡部は一方で

は農村の生活にたいするすぐれた観察者であり、新しい詩的現実の創造者であったが、一方ではたいへん観念的であつて、その色合いで一篇の詩すべてをそめあげたりしているのだった。この二つの側面がそれぞれどこから導きだされてきたのかについて、つきにつこんで考えてみたい。

#### 四

渡部信義の経歴は、松永伍一の『日本農民詩史』によれば、つぎのとおりである。

「明治三十二年（一八九九）福島県会津高田町に生れたかれは、中農の上クラスの家だったが、ほとんど百姓をしていない。大正九年（一九二〇）上京して通信省に入り建設課に勤務、二年ばかりして病気のため退職した。

それ以前『文章倶楽部』に抒情詩を発表し、三百篇くらい書きためていたというが、そんな世界にとどまることはできず、いきなり左翼運動に入る。その後、職業補導所へ入って労働組合を結成しようとしたあとクビになる。関東大震災で詩稿はすべて灰になり、郷里に帰って、一日一編のペースでかきためたのが、詩集『灰色の藁に下がる』となったと

いうことである。

これが詩集までの渡部の歩みだが、ここからも渡部が反体制的な思想をもっていたことがわかる。どのくらい体系的な思想だったかは別として、基調がそこにあったことはあきらかだろう。むしろそれはすでに引用した詩の内容からもいえることだが、またたとえば「黒電気」では押さえつけられたままの村人に向かつて、ムシロ旗をかかげてたたかった先祖を忘れたのかと怒りをぶつけている。あるいは「蕪沓の群」では、うばいとられたものをうばいかえすために町へ押しよせる農民を夢想している。また渡部の思想には、いまの「黒電気」、さらには最初に検討した「黒吹雪」という詩の題名からも想像がつくように、アナキズムへの近親感もあっただろう。

このように渡部が、農村の現状にたいする批判、そして支配にたいする対立といった方向の思想をいだいていたことが、その詩のベースとなっていたのである。

ところで渡部は今ふれた経歴のように農村とかかわりのある人間ではあるが農民ではない。生活のうえで都市での勤労者であって、関東大震災という偶然が一次的に農村と直接に結びつけたにすぎなかった。前田河広一郎

した現実がくっきりと見えてきたのである。

ここに詩の思想と表現をめぐるとの事実がある。この場合は反体制の思想をもつ詩人が現実に向かい、それをどう表現したかということだが、一方では打開の方向が出ないために暗い観念の抒情となり、しかし一方では暗さの根をつきとめるために観察を持続したとき、現実はかなりあざやかにとらえられた。外部というのは、観念的になりやすい反面、またよくものが見える場だともいえる。そしてもちろん詩的に意味をもったのは、観察による現実把握であって、そこに新しい詩の質が生みだされたのだ。もしも暗い観念だけにとどまったならば、反体制的な詩人のある思いがかきとめられたということだけにおわっただろう。渡部は農村の現状に反対する思想をもっていたが、それを詩のうえで表現するには、観察による生活の形象化こそが有効であったとわたしは考える。

またこういうこともいえるだろう。渡部のような反体制的な思想があったからこそ、現実にたいするこまかい、かなりしつこいといえる観察も生まれてくるということだ。対象を見ずえるには強烈な意欲がなければならぬからであり、そういう意欲は思想とかが

が「農村を出たインテリゲンツィアといふ風な人」といったのは、事実をふまえていたのである。先進的な思想をもった詩人が、農民として生きているのではない立場から、しかも真正面に農村の現実と向きあったこと——そこから渡部の詩にみられるいくつの特徴が生まれてきたと、わたしは思っている。

渡部にとって、久しぶりにじっくり接した農村は、あいかかわらずというか、よりいっそうというか、惨憺たる状況だっただろう。そこには長いきびしい労働と、それにたいする余りに少ないむくいがあった。しかもみなぎっている貧困にとっぷりつきながら、人々は余りにも柔順だった。都市の労働運動を経験した渡部にとっては、それはいらだたしいものであったろう。こんなことでは事態はいっこうに変わらないと思いが、しかし渡部にとっても解決の方向は容易に見つかるわけではない。そこで渡部のなかにあふれてくるのは、絶望の思い以外ではありえなかっただろう。こうして詩集には暗い観念と地をほうような抒情が満ちることになったのだ。

農村の生活がどんなにひどいものだったにしても、もしもその内部で生き、そこから変革を手きぐりしたとすれば、このように観念

わりがあるからだ。思想と表現は、このように相互作用的に関係している。

このあたりをより鮮明にするために、渋谷定輔の詩集『野良に叫ぶ』を対比させてみたい。渋谷の詩集は題名からくる印象や叫びたてるような荒々しい詩をいくつも含んでいることから、スローガン詩のはしりのようにだけとられるとしたら、それは正当な評価とはいえない。この詩集はすぐれた面をもっていて、それはそれとして十分に検討してみる価値があるが、いまの場合は渡部との対比からだけかたんにいっておきたい。まず渋谷は渡部とはちがって、まさにきついの農民であり、農民運動家であり、思想的にはこの詩集のころは農民自治的な傾向をもち、むしろ反体制的であった。

しかし思想から表現への流れは、二人はその違いでかわだっている。渡部の暗い主観にたいして、渋谷はもえたつような怒りにあふれた行動的な主観である。渡部のあのこまかい確な観察にたいして、渋谷はずっと大ざっぱであり、もともと描写的な姿勢をもっていない。渋谷にもいくつかの生活的な詩があり、そこに表現された現実性が詩的にもっとも進んだ部分だとわたしは思っているのだ

的なモノクロームの世界にはならなかったであろう。そこでは貧しさへの怒りはもっと直接的であって、出口は同じようにわからないにしても、観念におちいる余裕はなかっただろう。

あるいはまた、こんなこともいえる。内部にいれば、労働そのものはどんなにきびしくても、それにたずさわっている者だけにわかる楽しさや安らぎが一次的にでもありえたはずで、そうなれば渡部のように、灰色一色にぬりこめるようなことはできなかったのではないか。農村に近いところにしたとしても、やはり外から見ていことから、渡部の暗い観念的な抒情が生まれていると、わたしは思う。

しかし渡部の位置が外にあったことは、詩のうえではマイナスになったわけではない。もしも渡部がこの観念性にとどまったならば、外にいたことで制約されたということになるが、じつは外部の目で農村にたいしたからこそ、あのような現実描写が可能になったという面を見のがすことができない。農村の暮らしの渦中に生き、そこで怒りに燃えたっているのではなく、一歩距離をおいて、観察者として人と事物にたいしたとき、農村の寒々と

が、その現実性にしたところで、渡部とはずい分ちがう。たとえば「野良の喜び」という題名の詩があることでもわかるように、そこには働く楽しさといった側面もとらえられているが、こういったことは渡部にはないことだった、むしろ『灰色の藁に下がる』のころの渡部についてだが。

二人の対比のうち、渋谷が農村のどまんなかにいながら、農村にたいする観察力がほとんど働いていないことは注目されていい。自分はその渦中にとどまって、まわりの事物はあまりにも自明のこととなって、あらためて観察する気にはなれず、そのため見落しがちなものかもしれない。しかし詩的な伝達ということでは、観察は大切な要因のひとつである。現実の把握ということでは、外部にいた渡部の詩の方が、全体としては農村の実体を鋭くえぐりだしているという皮肉な結果が生まれたのだ。

ここまで考えておかなければならないことは、農村観察者としての渡部が実現した描写の質であろう。渡部はじっくりと農村の暮らしを見つめることによって、それを日本の詩にはなかったあざやかさをもって詩的に定着したが、その描写は詩的方法といえるま

で意識的なものだったのか。

はじめにいったように、『灰色の藁に下がる』が出たのは大正一四年（一九二五）であって、社会的な詩の系列では民衆詩派がようやくさかりをすぎ、プロレタリア詩はまだこれからという時期である。民衆詩派の農民詩に見られる、現実からの大きな距離、そしてつぎのプロレタリア詩に含まれる農民詩の、民衆詩派とは違った意味で、しかしやはり同じようにあった非現実性を考え合わせたと、渡部の詩がずばぬけていることはあきらかからず、そのうえさらになかを求めているのは無理ということになるのかもしれない。しかしそのことを認めたくして、やはり渡部のちみつま描写が方法にまで十分にきたえあげられたものではなかったことは、いっておかなければならない。渡部が農村の人と生活と事物をとらえようとすると意欲は強いものがあり、あのようにならざるを得ない。しかし方法というには表現に即してさらに意識的でなければならなかった。対象をもっとも鋭くえぐりだすために、ひとつひとつのこぼの選択にいたるまで、いっそうつっこんだ追求が必要であった。渡部はたしかに対象のあれこれをかきこまかくかきこんではい

## 五

予備知識なしに、つぎの詩をよんだとすれば、どのような詩人を思い浮かべるであろうか。「朝餉の煙」という詩の全文である。

野良に物音なく  
大気こまやかに  
地平ほのぼのと

うぶすなのふところ深く

しずかに夜明けになごむ村のたたまひ  
まどろみさめぬ緑の木陰にのぞく

藁屋根度ましく

やがてその藁屋根の間から

立ち昇る朝餉の煙

原始ながらさはやかに

曙の空にかかせる農の旗

わづらひもなく まどひもなく

ためらひもなき働きのいぶき

竈に火は焚きつけられ

力強くすこやかに

一日のいとなみははじまった

作者は渡部信義。昭和三九年（一九六四）

に出た詩集『日本田園』におさめられている。渡部には詩集『灰色の藁に下がる』のあと、昭和一五年（一九四〇）に詩集『土の言葉』があるが、これはそのまま『日本田園』に収録されたということだから、『灰色の藁に下がる』と『日本田園』の二冊によって、渡部の詩集のすべてがわかることになる。それにしても、いま引用した詩の作者が、あの反逆的な暗い抒情をくりひろげ、じっと生活の細部に目をこらしていた詩人だとは！ この詩はたんなる牧歌的なものじゃない。現実から、はるかに遠く、調子の低い通俗讃歌を、いったいどういふつもりでかきつけているのか。なんともあきれはてた変身ぶりである。

この『日本田園』の最初には、こんなことが記されている。

「土はすべてのものをいづくしみ、すべてのものを黙々とそだてる。その土に力をあわせ黙々とものをそだてる農の心。それは大和の心であり、自然の大生命の核心に参入する。」

もはや現代の詩とはいささかもかかわりのない地点に渡部はやってきているのである。大正期の反体制的詩人から、昭和期の平穩無

事な神がかり詩人への転換が、どのような事情によって行なわれたかは、わたしは知らない。ただ事実として、詩と思想は決定的に変わったということだ。むろんこの変化が一日でおきたわけではないだろうし、根強い原因もあつたのだろう。だからといって『灰色の藁に下がる』の詩の段階ですでにそれが準備されていたと見るとすれば、考えすぎというものであり、詩にあらわれない以上は、検討の対象にはならないのである。ともかく渡部の思想の変化の経過を追求することにはわたしはわずかの興味ももっていない。渡部の詩がまったく崩れざつたことだけを確認しておけばいいことだ。

渡部の場合にはさきにふれたように、詩的方法を確立していなかったために、思想の退化がそのまま直接に詩の退化となつたといえるだろう。しかしむろん思想がこれほど大きく変わってしまえば、それが詩へあらわれるのに、さして時間を要するはずもなかった。

『日本田園』は『灰色の藁に下がる』との関係でいえば、体制派の農村讃歌におちていながら、それでも農作業のあれこれの描写にはかつての痕跡をとどめているとはいえる。対象を見ている詩が部分的にはあるのだ。しか

## 西山勇太郎とわう一つの へ生きる意志のかたち

### 西山勇太郎ノート

寺島珠雄著 定価一、〇〇〇円

●直接お申し込みは  
くと郵送代は無料です。

『虚無思想研究』編集委員会

〒612 京都市伏見区桃山泰長老

観月橋団地10-301大月方

電話〇七五(六二二)七五六六

振替 京都九一七三七一

しらせをうけたとき

おれは印刷工場の脚立にまたがって  
校正刷りを見ていた  
からだか傾げ

植字ケースがたおれた  
活字が散らばり

冷えた床に鳴った  
わけあつての昼酒のせいであつた

隅の方で

おちつかない遺族が目を伏せていた  
どこからか見知らぬ若者があつまり  
葬儀をとりしきつた

赤旗をかぶせた柩の前で  
誦経のかわりに

上ずつた弔辞が読まれた

——君は吹きすさぶ嵐に抗して——

——大瞬間の途上に惜しくも散つた——

祭壇の横手

俯きかげんの

白い生えぎわが目を惹く

## 長谷川七郎

## 演歌

豆本、「新島栄治のこと」 秋山清  
初期のプロレタリア詩人「新島栄治のこと」という緑笛豆本の第一九二集が、突如送られてきた。内藤健治さんの著作である。

私には「初期のプロレタリア詩人」という言葉は眠りをさませられるような思いがした。そして新島栄治、松本淳三、陀田勤助等が初期の詩人とすれば、私などは末期のプロレタリア詩人になるだろうか、といえそうだし、そんなら末期は誰たちだろうか、とひよんなことを思つたりする。しかし、新島は何といつてもプロレタリア詩人の代表だつた。その詩の特長と意気軒昂に於てそうであつた。彼には処女詩集として、当世人々に記憶された「湿地の火」があり、二番目に「隣人」ともに大正期のもの、そして第三番目が「三匹の狼」だつた。このとき伊藤信吉、中野重治とともに私も発起人となつて、牛込神楽坂のあたりで集会をやつたことを覚えてゐる。いつ、どこで出逢つても私は子ども扱いにされたような記憶がある。いつも貧乏している私に、働き先を見つけてやると約束したこともあつた。

昭和の四十一年頃、「中野区上鷺の宮」に私が引越すとどうしたことか、彼はしげしげ

情のこわいとうわさの女

引つ詰め髪束ねを

痲性につらぬいた

古風な銀かん

話すとき頬がゆるみ

弓なりの目から

いっときの無心がこぼれた

地獄 極楽小路とよばれる

料亭と監獄の狭間に

間のぬけた歌声がながれ

摒ぎわの根雪に

連れションが腰をふつた

雪どけのぬかるみで

爪先が凍え

季節の記憶がそこでとぎれた

身内だけでひっそりと

しきたりの弔いをやりなおしたと

風のたよりできいた

とやつて来た。太ていの時彼は「ミソシルを作つてくれ」といつて頼んだ。毎回そうなので、その後は顔を見たらミソ汁と思えだなど、という、「何といつてもいいさ、お前も好きだろう」と答えた。餅を持って来たりパンを袋から出したり、わが家の者に気をつかわせまいとするところがありありと見えた。それらのことから、彼の家庭生活を考えて見たりもした。私を呼ぶに、「秋山」でなく、いづも以前の「局清」だつた。

第一詩集「湿地の火」を私は永く持っていたが、多分その本を私よりも大切にしような西杉夫に近頃進呈した。新島が死んでから十年くらいかな、と話すことがある。

（一九八四・一一・一五）

コスモス 第47号 (通巻86号)

▲定価五〇〇円▽

発行 一九八四年十二月三十日

編集人 秋山清

発行所 東京都中野区上鷺宮五一一八

コスモス社

電話 (03) 九九八一二九二五

印刷 (資) オカダ印刷

名古屋市中昭和区長戸町四一〇